

# ソロモン諸島で咲かせたソフトボールの「花」 普及の最前線

文・写真 井上 栄 (青年海外協力協会)

第5回

## さあ、大会開催へ



いのうえ・さかえ / 1980年12月11日生まれ。愛知県出身。小学校からソフトボールを始め大学までプレー。卒業後は愛知県公立中学校に体育教師として勤務。2007年に退職し、青年海外協力隊に参加してジンバブエ共和国(07年6月~08年3月)、ソロモン諸島(08年8月~09年12月及び10年4月~11年3月)に赴任。帰国後は、星槎名古屋中での勤務を経て、公社・青年海外協力協会に所属して駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に勤務。

ソロモン人の口コミの力で仲間が集まり、日本からの多大な協力でソフトボール用具が集まり、ソロモン人からの熱烈な要請で大会を開催することになりました。

普段の自由参加の練習と違い、大会開催となると何チーム参加するのか、いつ開催するのか、試合の形式、会場準備、審判の手配など決定しないとイケないことがたくさんあります。以前「ソロモンタイム」というこの国の文化を紹介しましたが、ソロモン人は時間に対する大らかさだけでなく、約束事に対してもとても大らかです。約束が果たされる確率は、50%くらいでしょうか(笑)。

大会開催のための話し合い、そして実際の大会は、新たなソロモンの文化、ソロモン・ソフトボールの歴史を知るとてもいい機会になりました。

前述の約束を交わすことの難しさに、大会日程・試合形式・審判などの運営方法は、私主導ではなく、ソロモン人の選

手たちに決めてもらうことにしました。そうしてソロモン人選手が決定した開催日は、イースター(復活祭)ホリデー期間中に開くことでした。国民の96%がキリスト教徒のソロモン諸島では、復活祭の日曜日を挟むように4連休があります。ソフトボールが盛んに行われていたころは、この国のソフトボール普及に尽力した人の名前から「OTUWANAノックアウトゲーム」という大会を行っていたようです。ノックアウトゲームとは、いわゆるトーナメント形式の大会を指します。

参加選手たちの総意によって「OTUWANAゲーム」という名前がイースターに大会を開くことになりました。ソロモンでソフトボールに親しんだことがある人なら、試合がいつ行われるかが分かるくらいの効力がある名前だそうなんです。そして、みんなが口々にオトゥワナさんへの感謝を口にしていました。普段あまり「ありがとう」という言葉を口にしないソロモン人



アイデアをくれた同僚。バックネット裏の草刈りも手にした大きなナイフで

アイディアをくれた同僚。バックネット裏の草刈りも手にした大きなナイフで



ソロモン諸島 Solomon Islands  
首都: ホニアラ (ガダルカナル島)  
人口: 約53万人  
言語: 英語、ビシン語  
面積: 2万8,900km<sup>2</sup> (岩手県の約2倍)  
大小約100の島々からなる英連邦の一国で、4000もの葉落が点在している。地理的にオーストラリアとの関係が深く、日本ともいろいろな面で友好を結んでいる。国民の大半が農業・漁業に従事しているが、近年は天然資源の開発で注目を浴びる。

砂浜の砂でライン引き。すべて手作業のため予想以上の労力だった



白砂のグラウンドで試合前のノックを受ける学生たち



試合前、両チームの選手は、手をつないで整列に向かう



ですが、何十年経っても感謝の意を忘れていない姿勢に感情表現の仕方が違うだけなのだとあらためて実感することができました。

え、簡易ゲームを行ってきました。ただ、やはり最後は本場の試合がしたい。一方で全員が初めてソフトボールをする学生たち。ルールも勉強したとはいえ、実際のゲームのイメージはあまり描けていません。

そこで、ソロモンに住む日本人と親善試合をすることにしました。ここが日本人のすごいところで、たとえ学生時代にソフトボール部でなかった人でも何となくルールを知っていて、捕ったり、投げたりできてしまっ

途上国に来て、多くの場面で日本の学校教育の素晴らしさを感じました。

この親善試合のときには、私を悩ます大きな問題がありました。グラウンドにラインを引くのに必要を石灰がなかったのです。しかし、体育の授業の一環で行うとはいえ、親善試合。私にはなるべく本物に近いグラウンドを用意したいと思っていました。まず、ソロモンで最も活発に行われていて、専用スタジアムもあるサッカー場にラインを

何で引いているか尋ねに行きました。答えは、「ペンキ」とのことでした。

しかし、このペンキは、決して安いものではなく、お金がない私たちにとっては手を出せない方法でした。ジンバブエでは麦の収穫でラインを引いていたことを思い出し、それに当たるものがソロモンにもないかと考えましたが、やはり思いつきません。そこで同僚に相談してみると、「これしかない!」と思える答えが返ってきました。さ

で、同僚は何を使ってラインを引くことを提案したと思いますか? 海に囲まれるソロモンらしいものです。

同僚が提案してくれたのは、なんと「白い砂浜の砂」です。1人で悩んでないで、早く相談してみればよかったですから思いました。そして、この出来事は、私の協力隊員としての活動の一つの道を示してくれました。「現地には合ったものをするには、現地の人たちのアイデアに耳を傾けること」

同僚のアイデアと協力で親善試合も大いに盛り上がり、学生は、ソフトボールの試合と日本人との交流を楽しんでくれました。今回は「OTUWANAゲーム」について紹介します。

### Information 現地での生活費について

途上国へ赴任した隊員は、現地の日本大使館や配属先への表敬訪問をする。また、JICA事務所健康や安全に関する説明を受けたり、銀行口座を開くなど2年間生活をしながら、ボランティア活動を行う準備を整える。派遣中は、国ごとに定められた現地生活費が支給される。この金額は、受入国の住民と同等程度の生活を営むに足る最低限度の金額に設定されている。また、現地生活費とは別にボランティアの状況(無職、無給休職参加など)によって、日本国内の支出や帰国後の社会復帰のための国内手当が支給される。  
HP/<http://www.jica.go.jp/volunteer>